JAPSW？

PSWという名称を考える

JAMHSW？

日本精神保健福祉士協会の英語名称の変更についての提案

IFSW副会長である木村真理子相談役から、2017年３月の「理事による会合」へ本協会英語表記変更のご提案がありました。そこには「PSW」という名称が世界的には使用されていない現状がありました。本誌では、この名称について構成員の皆様と考えていく機会として、連載を開始します。

日本精神保健福祉士協会相談役　木村　真理子

日本精神保健福祉士協会（以下、本協会）は、これまで組織の英語表記としてJapanese Association of Psychiatric Social Workers（ジャパニーズ アソシエーション オブ サイキアトリック ソーシャルワーカーズ）、略称をJAPSWとしてきました。サイキアトリック（Psychiatric）は、「精神医学の」を意味します。日本で50年以上にわたって使用されてきたPSW（サイキアトリックソーシャルワーカー）は、世界ではもはや死語となっています。この言葉を用いなくなった背景には、ソーシャルワーカーの仕事が精神医学に限定されないとの認識があります。時代の変化をふまえ、精神保健福祉士の英語名称としてMental Health Social Worker（メンタルヘルスソーシャルワーカー）、ソーシャルワークにはMental Health Social Work（メンタルヘルスソーシャルワーク）を用いることがよりふさわしいと考えます。本協会の構成員になじみのある「PSW」は、“日本の”業界用語として用いられてはいますが、国際的な普遍性はなく、現代社会になじまないとの印象を諸外国のソーシャルワーカーは持っているのです。

ソーシャルワーク専門職の世界定義は、2014年に「ソーシャルワーカーは社会変革を目指し、社会システムに介入する」と改訂されました。精神保健福祉士の仕事はメンタルヘルスを広くカバーしています。このことは、『精神保健福祉士の業務指針及び業務分類（第2版）』が示すとおりです。

筆者が世界のメンタルヘルス分野のソーシャルワーカーから情報収集をしたところ、「サイキアトリックソーシャルワーカー」という用語は、現在の仕事になじまないとの反応が多く、多くの国々で組織および専門職の名称が変更され、現在に至っています。

日本社会でも、今日「メンタルヘルス」という用語が普及してきています。社会と人々のメンタルヘルスの課題にかかわるソーシャルワークが精神保健福祉士（＝メンタルヘルスソーシャルワーカー）の仕事であるという理解を定着させることは、社会的に意義が大きいばかりでなく、専門職アイデンティティとも関連して重要です。英語表記は、専門職の内実と時代に即していることが望ましいと考えます。

日本の行政にPSWという用語が定着している状況ではありますが、世界のソーシャルワーカー組織と連携して機能する精神保健福祉士は、行政にも社会にも、新たな精神保健福祉士の英語表記を定着させてゆく役割があると思います。

以上をふまえて、組織の英語名称として、Japanese Association of Mental Health Social Workers（JAMHSW）（ジャパニーズ　アソシエーション　オブ　メンタルヘルス　ソーシャルワーカーズ）を提案いたします。

きむら・まりこ
PSW歴15年／日本女子大学 人間社会学部社会福祉学科教授（神奈川県）／日本ソーシャルワーカー連盟国際委員／国際ソーシャルワーカー連盟副会長・アジア太平洋地域会長

JAPSW？

PSWという名称を考える

JAMHSW？

2017年3月の理事会で、「JAPSW」という協会英語表記の変更提案がありました。「PSW」は日本では馴染み深い表現である一方、世界では使用されていない現状があります。構成員の皆さまは、この名称をどうお考えになりますか？

第２回　その成り立ちと込められた期待

柏木　昭

精神保健福祉士が国家資格化したのを機会に、PSWという呼称をMHSW（Mental Health Social Worker）と直訳的に変えるという企図はありませんでした。PSWはPsychiatric Social Workerの訳語で、「精神科ソーシャルワーカー」のことですが、精神保健福祉士の活動領域が広がったからといって、敢えてPSWという呼称を止めなくてもいいでしょう。

PSWなる呼称には歴史があります。本協会も今や刷新ブームで、「Change変える、Train鍛える、Strengthen固める」と、中期ビジョンを掲げていますが、歴史は智の財産です。「変える」といってもやたらに古いものを捨てていくことではありません。また単なるノスタルジア、郷愁で言っているのではありません。温故知新という言葉がありますが、広辞苑によると、「古きをたずねて新しきを知る」、「昔の物事を研究し吟味して、そこから新しい知識や見解を得ること」とあります。

昭和39（1964）年、日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会が発足して以来、PSWという呼称が普及しました。当初から、PSWは必ずしも精神科病院あるいは総合病院の精神科と領域を限定するものではなく、精神科医をチームの構成メンバーとして成り立つ病院、施設等に所属するソーシャル・ケースワーカーを、PSWと呼称することを期待したのです。当時、大学等で福祉を専修し卒業した児童福祉司、家庭裁判所調査官、保護観察所保護観察官等は、精神科医とチームを組んで、クライエントにかかわるPSWであると規定しました。

以後、PSWは医療・福祉・司法そして地域コミュニティの事業所等、多領域にわたって、その職域を広げてきました。一般医療では、ソーシャルワーカーは、MSWです。PSWは対照的で、わかりやすい。この呼称は残したいものです。

かしわぎ・あきら
PSW歴62年／聖学院大学名誉教授・聖学院大学総合研究所人間福祉スーパービジョンセンター顧問（埼玉県）／本協会名誉会長

予告！　今秋、WEBアンケートを行います

「ＰＳＷの皆さん、アディクションにかかわっていますか？」

～ 興味がなくても答えてね ～

アルコール健康障害対策基本法の推進、薬物使用等の罪を犯した者に対する刑の一部執行猶予の施行、さらに、ギャンブル等依存対策の検討等、我が国のアディクション問題への関心の高さは、過去に例をみません。

一方、地域の社会資源不足、適切な支援を担える人材不足の課題も指摘され、私たちソーシャルワーカーへの期待も高まっています。

そこで本協会では、WEBアンケートにより、全国各地で様々な相談支援を担われる構成員のアディクション問題に係る業務実態等を把握し、今後の協会としての取組課題を探ります。

アンケートの詳細は9月にご案内します。構成員すべての皆さまのご参加とご協力をぜひ！ お願いします。

分野別プロジェクト「発達障害・アディクション・うつ等」

PSWという名称を考える

2017年3月の理事会で、「JAPSW」という協会英語表記の変更提案がありました。「PSW」は日本では馴染み深い表現である一方、世界では使用されていない現状があります。構成員の皆さまは、この名称をどうお考えになりますか？

第3回　たとえどうであれ、「魂」変わらず

富島　喜揮

随分と以前に、組織の英語名称の変更（以下、名称変更）の提案があり、社団法人設立以前の理事会において議論したことがあります。結果は、賛否両論に分かれ、喧々諤々と意見が飛び交うこともなく、現状のままPSWを用いるということになりました。以降名称変更に関しては沙汰止みとなりました。今考えると、時期尚早だったのでしょうか。

なぜ名称変更の論議が深まらなかったのか振り返ってみますと、戦後日本に精神医学ソーシャルワーカーが誕生して以来、先達はPSWの呼称を支柱に、専門性の構築や社会的地位の獲得を目指して闘い、その拠り所としてPSWであることにこだわり続けたからではないかと考えます。

名称変更がPSW通信に載り、全国の構成員に向けて問題提起できるようになったのは、PSWが国家資格化され、精神保健福祉士の呼称で職業アイデンティティを築く構成員が多くなってきたからではないでしょうか。もしかすると、私がPSWであることにこだわって育ったように、現代の構成員は精神保健福祉士として育っているのかもしれません。

それでは、私の名称変更に関する考えですが、「悩ましい」の一言です。

理由は簡単です。これまで精神保健福祉領域で働くソーシャルワーカーとして、私を支え育ててくれたのは、まぎれもなくPSWという呼称であることは否定できないからです。また一方で、職域がひろがる精神保健の世界にあって、私たちの援助･支援の対象も、様々なメンタルヘルス課題を持つ人々となっています。そのため、スクールソーシャルワーカー（SSWer）として支援していても、PsychiatricとMental Healthと言った方がしっくりくることがあるからです。

私たちに対する社会の期待は、広範なメンタルヘルス課題に対応できるソーシャルワーカーなのでしょう。しかし、仮に世情に合わせて名称変更したとしても、これまで先達がPSWとして築き上げてきたものが、軽んじられては元も子もありません。たとえ、名称を変更しようとすまいと、私たちの本質が変わってしまうようなことがあってはならないと思います。

ところで、1999年の精神保健福祉士養成カリキュラムには「Y問題」は登場しません。「Y問題」がカリキュラムに登場するのは、2012年の養成課程における教育内容等の見直し以降です。13年もの間、精神保健福祉士の価値の根源ともいえる「Y問題」に触れることなく育った精神保健福祉士が誕生しました。また、現場では、理由はどうあれ当事者との「かかわり」が希薄になったとも仄聞します。

私が最も危惧するところは、表面的な名称談議になってしまうと、「Y問題」から学びえた私たちの価値観や思想が、遠い過去のものになっていくということです。

“たとえどうであれ、「魂」変わらず”です。

とみしま・のぶき
PSW歴38年／四国学院大学社会福祉学部教授（香川県）

PSWという名称を考える

2017年3月の理事会で、「JAPSW」という協会英語表記の変更提案がありました。「PSW」は日本では馴染み深い表現である一方、世界では使用されていない現状があります。構成員の皆さまは、この名称をどうお考えになりますか？

第４回　PSWはソーシャルワーカーです

大橋　雅啓

本稿の執筆依頼を受けた後、中国深圳市で開催された「第24回アジア太平洋地域ソーシャルワーク合同会議」に参加する機会を得ました。多くの参加者にとって英語は第二外国語です。

そこであえて「私は日本のPSWです」と自己紹介すると、他国のソーシャルワーカーから意外な反応が返ってきました。「なぜ、ソーシャルワーカーじゃダメなの？」、「あなたは精神科病院で働いているわけではないですよね」と。国際会議の場では、PでもSでもMでもなく、「I'm a Social Worker from Japan」の方が通りがよいのです。

もう少し、この点について他の意見を聞いてみたくなり、帰国後英語圏のソーシャルワーカーにたずねてみると、

- ジェネラリストソーシャルワークの教育を受けているので、精神科にこだわらない（米）
- クライエントのゴールが一緒なソーシャルワーカー同士で呼称を変える理由が分からない（豪）
- 言葉としては精神科領域であればPsychiatricではなくMental Healthでは？（英）
- 同じような問題を抱えている、職業アイデンティティーの問題が背景にある（印）

といった回答が戻ってきました。

PSWの由来が、無資格時代に精神科病院で多職種チームの一員として働くワーカーの呼称として広まったことにあり、我が国では、遅々として社会的入院者の地域移行が進まない現状を鑑みれば、職業アイデンティティーとしてP（精神障害者支援、精神医学や精神科病院等）へのこだわりがあり、このことはしっかりと次世代に継承すべき、職業人としての矜持とも言えます。しかしながら、世界で通用する共通言語という点からみると、どうも言葉として限界があるように思います。

地域包括ケア時代にあって、ソーシャルワーカーの役割に対する国や社会の期待感が大きく変化しており、私たち精神保健福祉士の存立基盤が大きく揺らいでいるという点も否めないところです。今後は、精神保健という切り口で、地域に飛び込んでいかなければ、ソーシャルワーカーでなければできない大切な地域の役割に乗り遅れるだけでなく、PSWの理念としてのメゾ・マクロの実践を十分に展開できなくなるように思われます。

最後になりましたが、私の立場としてはMental Health Social Worker肯定派です。英語表現としての国際的な実用性や、カタカナ音としては広く一般化している点をあげます。また、呼称によってソーシャルワーカーとしての活躍範囲が狭められることを非常に憂慮しており、他団体も含めてわが国としての新たなソーシャルワーカーの枠組み（連携のあり方等も含め）を考える時期ではないか、という提言をさせて頂きたいと思います。

おおはし・まさのぶ
PSW歴25年／東日本国際大学健康福祉学部（福島県）

JAPSW？ JAMHSW？

PSWという名称を考える

2017年3月の理事会で、「JAPSW」という協会英語表記の変更提案がありました。「PSW」は日本では馴染み深い表現である一方、世界では使用されていない現状があります。構成員の皆さまは、この名称をどうお考えになりますか？

第5回　すべての人にとってのこころの健康という観点から

佐藤　恵美

私は、活動領域を産業保健におく精神保健福祉士である。所属する精神科クリニックは主に労働者を対象とし、併設のセンターは、企業に様々なメンタルヘルスサービスを提供している。このセンターは、MPSセンターと称しているが、MPSとは、Mental-Health Professional Supportの頭文字である。まさしく議論の「メンタルヘルス」という名称を当てているわけだが、産業保健の分野では、こころの健康として最も広く認知されている呼び方である。

私は、精神科病院勤務を経た後、産業保健領域で働き始めたが、当初メンタルヘルスという言い方にも、心理職をカウンセラーと呼ぶのにも、やや抵抗を感じた。しかし、産業保健領域において、こうした言い方が流布してきたのは、医療が必要な人だけでなく、誰にとってもこころの健康が身近な課題として受け入れられやすいという観点から言葉が選択されてきたためであろうと推測できる。

翻って、PSWの名称議論においては、我々がどう呼ばれたいかではなく、どの名称を使うことが「誰にとって」「どのように役に立つのか」と考えるべきではないだろうか。もはや、こころの健康問題とは、精神障がい者だけを対象とせず、予防的観点も含めてすべての人の課題であり、また、職域・地域社会の課題であることをも意味する。とするならば、それらの概念を包含し、多くの人に受け入れられやすい「MHSW」という名称への変更は、国際的通念という観点のみならず、大きな意義があるのではないだろうか。

とは言え、「P」に込められた先達の思いは深く、僭越ながら私自身も例外ではない。まだ精神保健福祉士が資格化されない頃、「精神障がい者は世の中で最も差別され、社会的に追い込まれた存在なのではないのか。その人たちのために一生をかけて役立ちたい」という志を胸に「PSW」を目指した自分は、決して過去のものになっていないつもりである。誰にも受け入れられやすい言葉を採択することが、専門職としての使命感を希薄化させ、重い苦しみを背負っている人が置き去りにされるようなことは決してあってはならないとも思う。

詮ずるところ、誰もがこころの健康を自明の課題とできることを助勢し、我々が広い領域でこころの健康に寄与するためには、「メンタルヘルス」を冠した名称変更には、一定の意義があると思うと同時に、今一度、精神保健福祉士としての本質をも問い直し、しっかりと礎石を築くべきであろうとも考えている。

さとう・えみ
PSW歴23年／医療法人社団弘冨会 神田東クリニック副院長、MPSセンター副センター長（東京都）

JAPSW？ JAMHSW？

PSWという名称を考える

2017年３月の理事会で、「JAPSW」という協会英語表記の変更提案がありました。「PSW」は日本では馴染み深い表現である一方、世界では使用されていない現状があります。構成員の皆さまは、この名称をどうお考えになりますか？

第６回　PSWとMHSW

柴山　久義

私の中学校までの通学路は精神科病院の精神科病棟の中庭側に沿ってあり、毎日その横を通って３年間通っていました。中庭には患者さんが集って一緒にレクレーションをやっていたり、ときには患者さんたちが中学校の校庭に散歩で来ていました。そうした体験があったためか、精神科についての違和感はありませんでした。

大学に入りソーシャル・ワーカーの職に関心を持つようになり、私はPSW という職に就きました。PSW（Psychiatric Social Worker)、精神医学ソーシャル・ワーカー、精神科領域のソーシャル・ワーカーとして患者さんに関わり支援していきたいと思い、選択しました。

私が就職したのは1971年です。精神衛生法の一部改正から５年が経過していた時期で、単科の精神科病院でした。「入院中心から外来中心医療へ」「病院中心から地域へ」と言われた時期でした。勤務した病院も作業療法が盛んで退院への取り組みが行われ、退院に向けて、現金所持化、病棟の開放化を進めていた時期でした。

その一方で、今さら退院して苦労するよりも病院の中でいかに楽しく過ごせるかを考えたほうが良い、という病院パラダイス論もありました。措置入院という強制入院制度や、長期入院による隔離と収容等を間近に見て、病院活動から地域での保健所ソーシャルクラブや共同作業所、共同住居づくり、精神科デイケアの立ち上げにも参加してきましたが、精神医療の限界も感じていました。

PSWとして精神科病院で20年従事した後、精神保健福祉センターに異動し13年、以後保健所で５年従事し定年退職になりました。私自身、病院から外へ外へと勤務場所が変わり、精神科領域では病名の変更や精神障害者を福祉の対象として捉えられる面も出てきましたが、40余年経過した現在も基本的にはあまり変わっていないと思います。

精神医療と切り離せない対象者を考えると、精神医学、精神科を示すPを切り離せないと思います。メンタルヘルスの時代と言われ、対象者、考え方も多く変化してきました。そうしたなかでPSWからMHSWへと名称変更が提案されることは理解できます。しかし、精神障害者の長期入院や差別と偏見は以前と変わっていないこと、医療体験がないまま現場に出る精神保健福祉士が多くなり、精神保健福祉士の実習で病院実習を必修にせざるを得なくなったことを考えると、Pという原点が薄まらないように気を付ける必要を逆に強く感じます。精神保健福祉士の業務が拡大してきても、活動の原点は精神医療と切り離せないと思います。病院実習が必修となり、その後の精神保健福祉士の活動をもう少し見守った上での議論でも良いのではと思います。

しばやま・ひさよし
PSW歴43年／藤枝市地域活動支援センターきずな 相談室きずな（静岡県）勤務／前身の日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会を含む本協会理事（10期20年）経験者

JAPSW？ JAMHSW？

PSWという名称を考える

2017年3月の理事会で、「JAPSW」という協会英語表記の変更提案がありました。「PSW」は日本では馴染み深い表現である一方、世界では使用されていない現状があります。構成員の皆さまは、この名称をどうお考えになりますか？

第７回 「メンタルヘルスソーシャルワーク実践の深化 ～パラダイムの再考～」

今村　浩司

上記タイトルは、9月14日、15日に長崎で開催されます、第54回公益社団法人日本精神保健福祉士協会全国大会・第17回日本精神保健福祉士学会学術集会のテーマです。本大会のWEBサイトでは、「『我が事・丸ごと地域共生社会』政策のもと『地域包括ケアシステム』の導入」、「新たなメンタルヘルスの課題を抱える方々へのかかわりが必須」、「様々な支援対象（貧困、様々なマイノリティ、虐待、DV、いじめ、ひきこもり、アルコール・薬物・ギャンブル依存、自死、うつ等）への理解が必要となり、活動領域も医療、保健、教育、産業、司法等に拡大」等々と、現代社会の激動の変化に対応していくために必要な言葉がたくさんあげられています。本大会では、精神保健福祉士が培ってきた専門性やパラダイムを再認識し、それらを基に新たなるメンタルヘルスソーシャルワークについて考えていくという、非常に重要な大会になりそうな気配がして、大きな風が、九州は長崎から吹き始めているような感じがします。

振り返ってみますと、私は21世紀がスタートした年から本協会の九州・沖縄ブロック選出の理事を仰せつかり、診療報酬委員長やクローバー運営委員長を歴任し、「精神保健福祉士の正統なる評価」を求め続けて現在まで継続して理事をさせていただいています。理事に就任した2001年の全国大会開催地は、私の地元である福岡県でした。その時のテーマは、「出会い、学び、成長するPSW―21世紀は福岡から始まる―」でした。「出会って、学んで、成長したPSW」が、時間の流れとともに、新たなるメンタルヘルスソーシャルワークの深化を考えられるまでになり、本当にうれしく思います。

私は長崎大会の担当理事として微力ながら運営のお手伝いをさせて頂いていますが、たくさんの構成員の方々にお越しいただき、この「メンタルヘルスソーシャルワーク実践の深化」の「今まで」と「今」、そして「今から」のことについて、活発な意見交換ができればと願っています。

以上のようなことから、私は、専門職能団体として、一早くメンタルヘルスソーシャルワークのアピールをすることの検討を始める必要性を感じ、メンタルヘルスソーシャルワークの進化や新化や深化が、少しでも前進していくことを期待して活動していきたいと思います。

前回の第6回「PSWという名称を考える」を執筆されました柴山久義さん（静岡県支部）のご冥福を祈ります。

本誌No 214の本連載にてご寄稿された柴山久義様は、本年6月1日に永眠されました。柴山様は2016・2017年度の倫理委員でもあり、協会活動に長くご尽力いただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

いまむら・こうじ
PSW歴29年／西南女学院大学 保健福祉学部 福祉学科（福岡県）勤務／本協会理事

JAPSW？　JAMHSW？

PSWという名称を考える

2017年３月の理事会で、「JAPSW」という協会英語表記の変更提案がありました。「PSW」は日本では馴染み深い表現である一方、世界では使用されていない現状があります。構成員の皆さまは、この名称をどうお考えになりますか？

第８回（最終回） PSWという名称について考える

久保木　智洸

僕はPsychiatric（精神医学の）SWより、Mental Health（精神上の健康）SWの方が今の精神保健領域のソーシャルワーカーに適している名称だと思います。それは一般の方にP（ピー）SWと名乗っても何の専門職なのか分かりにくいですが、MH（メンタルヘルス）SWという名称であれば、どんな領域の専門職なのか、より相手に伝わりやすいと思うからです。

僕は福祉系大学で3年次に社会福祉士の実習を行い、4年次に精神保健福祉士の実習を行って、卒業時に二つの資格を取った時から「何で同じソーシャルワーカーの資格なのに、2つに分かれているのだろう？」という疑問がありました。

その後、精神保健福祉センターと精神科単科の病院に勤めてから「精神保健領域で先人のワーカーが実践してきたことの積み重ねが、今の制度や仕組みに繋がっているのだ」という気づきがありました。そして他の領域で社会福祉士として働くソーシャルワーカーとは、似ているけれど、ご本人の意思によらない強制入院のある精神科領域だからこそ、より大切に患者さんの権利擁護に向き合っていること、また地域移行などの独自の課題があるように思いました。先に制度化されていた社会福祉士という資格では、この問題意識を中心に据え置くことは難しいのだろう、だからこそ先輩方は精神保健福祉士というソーシャルワーク専門職を作り上げたのだろうと思いました。

病院に就職してからは、色々な名称で呼ばれることに違和感を覚えました。患者さんからは「ワーカーさん」と呼ばれることが多いです。他職種からは「ケースワーカーさん」と案内されることもあります。医療保護入院の患者さんには「退院後生活環境相談員です」と名乗ります。入院診療計画書には「精神保健福祉士」と書きます。そして家族や友人に職業を聞かれると分かりやすい様に「病院の相談員だよ」とも言います。

このことについて最近出した答えは、自分が何という呼び方をされてもソーシャルワーカーとして行動していることが大切なのだということです。ケースワークをしていても、退院後生活環境相談員としての業務をしていても、その行為の後ろに何があるのかということを常に意識して、広い視点を持ち続けることが重要なのだと考えました。

PSWがいいのかMHSWがいいのかという問いは、我々精神保健福祉士が、より良い社会作りを続けていくために、国際的に通じる名前にしよう、もっと社会に知ってもらおうとする１つのソーシャルワークなのだと僕は捉えています。どちらの名前になるにせよ、SW（ソーシャルワーカー）であることが一番大切なのだと意識しながら、毎日の業務にあたっていきたいと思います。

くぼき・ともひろ
PSW歴４年／地方独立行政法人山梨県立病院機構　山梨県立北病院（山梨県）勤務